

## 子ども造形ワークショップにおける 「コンセプト」と「場」の重要性

The importance of “concept” and “place”  
in a children’s plastic arts workshop

小島雅生\*  
Masaki KOJIMA

キーワード：造形ワークショップ、現代美術、コンセプト、場

Key words : plastic arts workshop, contemporary art, concept, place

### 要約

現在、様々な地域や社会において多くの造形ワークショップが広がっている。その中でも子どもを対象とした造形ワークショップが美術館をはじめ、学校や社会福祉施設、アートイベントなどで開催されている。

本稿の目的は、あいちトリエンナーレ地域展開事業「あいちアートプログラム」の「キッズ・プログラム」として碧南市藤井達吉現代美術館で筆者が担当した造形ワークショップ、「今の気持ちを詰め込む宝箱 ―藤井達吉の発想と自由なコラージュ―」を通して、子ども造形ワークショップにおける「コンセプト」と「場」の重要性を考察することである。

「現代美術」を「コンセプト」、「碧南市藤井達吉現代美術館」を「場」と設定し、子ども造形ワークショップを計画、実施した。その結果、日常からの新たな発見や気づきが生まれ、美術館の展示から受けた影響による発展が見られる作品につながった。また「自由に組み合わせた」という感想から、参加者が主体的に造形のプロセスや結果を楽しむという造形ワークショップの目的が達成できたといえる。

### Abstract

Today, the use of a wide range of plastic arts workshops is spreading in various regions and societies around the world. As part of this trend, plastic arts workshops for children are being held at venues including art museums, schools and social welfare facilities, and art events.

The purpose of this paper is to consider the importance of “concept” and “place” in

---

\* 東海学園大学教育学部教育学科

a children's plastic arts workshop through the plastic arts workshop "*Ima no kimochi wo tsumekomu takarabako: Fujii Tatsukichi no hasso to jiyu na koraju*" ("A treasure box filled with how we feel today: The ideas of Tatsukichi Fujii and free collages") on which the author worked, held at the Hekinan City Tatsukichi Fujii Museum of Contemporary Art as part of the Kids' Program of the Aichi Art Program, a community project of the Aichi Triennale.

The author planned and implemented a children's plastic arts workshop employing "contemporary art" as the "concept" and the "Hekinan City Tatsukichi Fujii Museum of Contemporary Art" as the "place." This resulted in new ideas and observations from everyday life that led to some works that showed development of influences from the exhibitions in the museum. The comment from a participant that "I was able to create my work freely" can be said to indicate that the plastic arts workshop was able to achieve its objective of enabling participants to actively enjoy the process and results of plastic arts.

## 1. はじめに

現在、様々な地域や社会において多くの造形ワークショップが広がっている。その中でも子どもを対象とした造形ワークショップが美術館をはじめ、学校や社会福祉施設、アートイベントなどで開催されている。子どもたちの多くは、造形活動の楽しさや創造の素晴らしさ、普段とは違った環境での自己解放と表現の場を求めて参加する。その参加者である子どもたちにとって「よい造形ワークショップ」とはどういうものであろうか。

様々なところで開催される造形ワークショップの中には、知識や技術の習得や資格の取得などを目的とすることに特化したものもある。また参加者側、特に子どもたちの保護者にもそれを求める傾向が見られる場合がある。確かに知識・技術が向上する喜びは感じることができる。

むしろ、造形ワークショップ全体につらぬかれた発想や目的である「コンセプト」、そして造形ワークショップを行う場所や環境の意味や効果である「場」を大切にすることにより、造形活動の意義や可能性、社会とのつながり、豊かな人間性の育成に結びついていくと考えられる。それが、子どもたちにとってより「よい造形ワークショップ」となるのではないであろうか。

「ワークショップ」という言葉は、様々な領域で広く使われている。中野(2001)は、ワークショップとは「講義など一方的な知識伝達のスタイルではなく、参加者が自ら参加・体験して共同で何かを学びあったり創り出したりする学びと創造のスタイル」であると述べている。また、「参加」「体験」「グループ」をキーワードにあげ、「『参加』とは先生や講師の話を一方向的に聞くのではなく、自ら参加し関わっていく主体性、『体験』とはアタマだけではなく身体と心をまるごと総動

員して感じていくこと、『グループ』とはお互いの相互作用や多様性の中で分かちあい刺激しあい学んでいく双方向性」とまとめている。

高橋（2011）は、「先生と生徒がいるのではなく、講師にあたる人も参加者もまったく同じ立場で、一緒になって創造の場と時間を共有することによって新しい創造世界が生まれてくる活動」を呼ぶのに適した言葉としてワークショップという言葉を使うようになった。さらに、「複数の人たちが創造的な場と時間を共有するなかで『あ、こういうものが生まれてくるのか』『こういうものが見えてくるのか』という新たな発見がある」プロセスこそがワークショップであると定義している。

高橋（2012）は、「美術の分野でのワークショップ」を造形ワークショップと呼び、「造形の楽しさをあらゆる人たちが享受できる営みで」と述べている。さらに、「参加者が主体となって造形のプロセスや結果を楽しむことが最大の目的であるから、知識や技術の習得や資格の取得などを目的とするのではなく、指導したり評価したりする教師とよぶべき存在は不要である」と述べている。さらに、「ワークショップの大きな目的や達成される目標を明示して計画を練って準備を整え、参加者が活動を始めたら後ろから見守るファシリテータ」の必要性を強く説いている。また、ワークショップに多くみられるグループ活動などの形態は、その本質的規定とはならない考えを示し、「参加者一人だけのワークショップもまたワークショップである」と論じているのも興味深い。

以上のことから、「ワークショップ」とは、また「造形ワークショップ」とは、講師や先生とよぶべき存在が一方通行的な指導を行うのではなく、参加者が主体となって造形のプロセスや結果を楽しむことを目的として、知識や技術の習得や資格の取得などのみを目的とせず、参加者が一緒になって創造の場と時間を共有することによって見えてくる新たな発見のプロセスであり、営みであるといえよう。

造形ワークショップの定義を前提に、子どもにとって「よい造形ワークショップ」とは何かを考える。参加者が主体的に活動してはいるが、「制作活動の楽しさ」のみを体験するものでは「よい造形ワークショップ」とはいえない。参加者が造形活動を通して新たに発見できるプロセスや感動を得られる必要がある。そのためには造形ワークショップを開催する側が、造形ワークショップ全体につらぬかれた目的や達成される目標を明確に示し、促進する必要がある。参加者に開催者側の意図がより伝わるため、また参加者と開催者が共に目的を達成できるための重要な要素として「コンセプト」と「場」をあげる。

「コンセプト」を、概念や観念として事物の本質をとらえる思考、骨格となる発想や観点と定義し、知識や技術向上という具体的な効果だけでなく、感じ発見することにつながるキーワードとする。

「場」には、「造形ワークショップ」を実際に行う場所や環境という意味と、参加者が共有す

る創造の場という意味がある。どんな場所や環境でも様々な造形活動はでき、設定した目的を達成、創造的な場を共有することができる場合もある。しかし「なぜこの場でおこなうのか」、「この場にどんな意味があるのか」「この場だからこそ生まれた造形ワークショップ」という考えで「場」と向き合うことによって、より意義深い造形ワークショップにつながる。

そこで、具体的に「コンセプト」と「場」を設定し、造形ワークショップを計画・実施することによって得られる結果を探る。あいちトリエンナーレ地域展開事業「あいちアートプログラム」の「キッズ・プログラム」として碧南市藤井達吉現代美術館で開催する造形ワークショップ、「今の気持ちを詰め込む宝箱 ―藤井達吉の発想と自由なコラージュ―」を通して考察していく。

現代美術の祭典であるあいちトリエンナーレの普及・教育活動としての地域展開事業から、そして開催場所である美術館名にもあることから、必然的に「現代美術」というキーワードを「コンセプト」とすることとなった。

「現代美術」「現代アート」の定義や区分は様々なものがあるが、ここでの「現代美術」はあいちトリエンナーレが示す方向性のもとに解釈する。藤田（2009）は、「現代アートは、未知覚だった物事に対する『気づき』を与えてくれる」と述べている。さらに、「現代アートがもたらす『気づき』によって、無自覚だったこと、知らなかったこと、考えもしなかったこと、ボンヤリとは感じていたけれど明確には意識していなかったことなどに触れ、それまでとはまったく違う世界が開けてきたり、新しい感覚で物事を見ることができるようになったり、新しい価値観に触れることができる。それもまた、現代アートの醍醐味」と述べている。

よって、現代の多様な価値観に出会い、「気づき」によって得られるこれまでとは違った世界に触れ、新しい感覚や視点でものごとに向き合うことができるという意味での「現代美術」を「コンセプト」に、造形ワークショップを構築する必要がある。

「碧南市藤井達吉現代美術館」を「場」として造形ワークショップを計画するにあたり、『「碧南市藤井達吉現代美術館」でおこなう意味』、『「碧南市藤井達吉現代美術館」が求める、造形ワークショップを通して伝えたいことや目的』を考える必要がある。

最初に「美術館でおこなう意味」から、美術館ならではの、美術館だからこそできるワークショップという考えに達する。即ち、本物の美術作品が展示してあり、その作品を造形ワークショップの開催場所で鑑賞できることである。

次に「美術館が求めること」にも関係するが、美術館という場が、子どもたちにとって、美術作品を鑑賞するだけでなく、様々な創作に触れながら豊かな感性を養い表現力を身につけることができる制作活動の場でもある、ということ伝える必要がある。そしてより多くの子どもたちが美術館を利用する機会につなげるべきである。

もうひとつの考えとして、美術館の名前にも登場する「藤井達吉」という人物に触れるということである。郷土の偉大な芸術家藤井達吉の芸術観や業績、作品をより多くの人々に伝える、さ

らに次代を担う子どもたちに伝えることが、碧南市藤井達吉現代美術館が求めることの大きな柱といえる。

したがって、美術作品鑑賞や制作活動など、美術館の存在価値を多くの人々に伝え、利用できる場所であることを示すとともに、藤井達吉の人物像や芸術観に触れ、本物の作品を鑑賞し、その作品との出会いから生まれる発見や感動を体験できる「碧南市藤井達吉現代美術館」を「場」として設定し、造形ワークショップを計画する。

本稿の目的は、子ども造形ワークショップの「コンセプト」と「場」を設定することで、子どもたちにとって「よい造形ワークショップ」となることを実践によって確認し、考察していくことである。

## 2. 「コンセプト」と「場」を基にした造形ワークショップの方法

あいちトリエンナーレ地域展開事業「あいちアートプログラム」の「キッズ・プログラム」造形ワークショップ、「今の気持ちを詰め込む宝箱ー藤井達吉の発想と自由なコラージュー」を計画、実施するにあたり、開催日時を平成24年8月11日（土）の10時から15時に設定し、対象者を小学生とした。また、造形ワークショップの会場となる碧南市藤井達吉現代美術館地下1階創作室のキャパシティーから、募集定員を20名とした。

応募人数は63名。抽選の結果、参加当選人数を24名とし、実際の参加者数は21名。小学校低学年が約4割、中、高学年がともに約3割（表1）。男女比は、男子10名、女子11名。参加者の約3割にあたる6名は実施市町の子どもたちで、15名は遠方の東京都渋谷区をはじめ、西尾市、大府市、名古屋市、刈谷市、高浜市からの参加であった。

造形ワークショップ担当作家及び進行としての筆者をはじめ、美術館教育普及スタッフ（子どもワークショップ担当スタッフ）3名、美術館学芸員1名、地元の作家1名、学生ボランティア1名の計7名のスタッフで進めていった。

表1 参加者の年齢（学年）

学年	(人)	(%)
1年生	5	23.8
2年生	4	19.0
3年生	3	14.3
4年生	3	14.3
5年生	4	19.0
6年生	2	9.5
(計)	21	100.0

「現代美術」という「コンセプト」、「碧南市藤井達吉現代美術館」という「場」を基に、造形ワークショップの大きな目的や達成される目標を明示して計画を進める中で、はじめに、「場」から考えられることとして、藤井達吉の作品を実際に鑑賞する機会を設定する。学芸員の解説を交え、藤井の用いた技法や発想に触れる。展示作品である「継色紙」の世界は、総合的な美意識の結集として、絵画、図案、工芸、書、歌を結合させたものである。その型にとらわれない斬新な発想や技法を作品に反映させる。また、小原和紙という素材を用いることで、藤井が指導し、発展させた小原和紙工芸の理解につなげる。さらに、所蔵作品である「螺鈿象嵌小箱」を鑑賞す

ることにより生まれるインスピレーションを表現できるよう、箱状の作品を制作するという発想をした。

さらに、「現代美術」という「コンセプト」より、藤田（2009）が述べた「気づき」によって新しい感覚や視点を得られるためにはどのような案が必要かを考えた。結果、箱状の作品を「宝箱」と設定する。「宝箱」に入れる宝物は通常、具体的な形をもつ物質であるが、この造形ワークショップでは、かたちのない宝物、即ち今現在生きている中で抱いている気持ちや将来の夢を宝物とする。普段、かたちのない気持ちや夢を宝物として「宝箱」にしまう観念は持ち難いが、新しい感覚や視点を持つことにより、様々なものが宝物になり得ることに気づく。さらに、今の気持ちや感動に向き合うことは、藤井がその時に感じた気持ちや思いを和歌にして表現した作品である「継色紙」の発想に連結する。

「造形ワークショップ」の定義より、参加者が主体となって造形のプロセスや結果を楽しむことができるようにするために、コラージュ用の様々な種類の素材を用意する。参加者が、どんな作品にしたいかと考え、自ら素材を選択し、宝箱にコラージュできるようにする。また、はじめて使う小原和紙や様々な素材に触れることにより、想像力及び創造性を身につけることができるようになる。

以上の考えをまとめ、造形ワークショップ「今の気持ちを詰め込む宝箱 – 藤井達吉の発想と自由なコラージュ–」として内容を検討、ワークショップの工程を計画した（表2）。

表2 造形ワークショップ「今の気持ちを詰め込む宝箱 – 藤井達吉の発想と自由なコラージュ–」工程

工程	内容	ポイント、用意するもの、素材など
1	はじめのことば	造形ワークショップ担当作家 自己紹介
2	ワークショップ内容説明	作品サンプル
3	学芸員による解説を交えた作品鑑賞	常設展示作品「継色紙」を中心に
4	木材組み立てによる箱制作	木材、金槌、釘、木工用ボンド
5	箱外側の絵具による着彩	アクリル型絵具
6	お昼休み	各自昼食用意
7	作品「螺鈿象嵌小箱」鑑賞	所蔵作品「螺鈿象嵌小箱」
8	蝶番などの金具を用いた箱蓋取り付け	蝶番、錠、木ネジ、ドライバー、キリ
9	箱内側に小原和紙コラージュ	小原和紙、木工用ボンド、筆
10	今の気持ちや夢などを箱内側に書き込み	耐水性マーカー
11	箱外側に様々な素材をコラージュ	ガラス類、金属類、自然素材、紙粘土など
12	作品鑑賞	参加者制作作品の鑑賞
13	おわりにことば	ワークショップのねらい、目的、意義の伝達

### 3. 「コンセプト」と「場」を基にした造形ワークショップの実施手続き

はじめに、造形ワークショップ担当作家及び進行役である筆者の自己紹介、及び他の造形ワークショップスタッフの紹介をした。

次に、「今の気持ちを詰め込む宝箱 — 藤井達吉の発想と自由なコラージュ— という造形ワークショップでどんな作品を制作するのかを、筆者が制作したサンプル（図1）を提示しながら説明をした。作品サンプルを提示することによって、完成形のイメージにつなげる。しかしここで注意すべき点は、作品サンプルをみたが故に、イメージが固定されないよう、また作品サンプルの模倣にならないようにすることである。

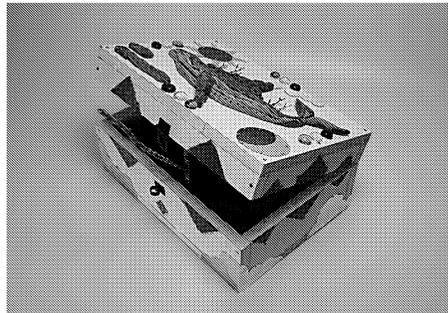


図1 造形ワークショップ作品サンプル

ここで、「コンセプト」である新しい感覚や視点でものを考える「現代美術」の考えから生まれたストーリー、「かたちのない宝物」の話をする。参加者である子どもたちに、今回の造形ワークショップの目的を伝えた。



図2 藤井達吉の常設展示鑑賞

次に、造形ワークショップをおこなう会場である創作室から常設展示室に移動し、藤井達吉の作品を鑑賞した。実際に藤井の「継色紙」の作品を中心に鑑賞し、藤井が小原村の和紙工芸を芸術に高める指導をしたこと、作品にはその時の気持ちや感動を和歌に込めて書き留めてあることなどが学芸員より説明された（図2）。

創作室に戻り、箱の組み立て作業に入った。用意した材料は15ミリ厚のラワンベニヤ材。高さ130ミリ、幅295ミリ、奥行き210ミリの宝箱が出来上がるようにカットした10枚の部品からなる。どのように組み立てるかという手順の説明からはじまり、道具の説明や使用方法、釘の打ち方、ベニヤ端部分の紙ヤスリによる研磨の方法などを伝えた。参加者の約4割が低学年で、釘打ち作業の未経験者が多かったが、自分の手で組み立てられることを目指した。木工用ボンドで仮組立をし、釘打ち作業が困難な子どもにはスタッフがうまく補助に入るなどして、参加者全員が自分で組み立てることができた（図3）。



図3 箱組み立て作業風景

箱のかたちが組み立てあがったら、次に箱の外部をアクリル系絵具で着彩する（図4）。

お昼休みの間を、絵具の乾燥時間にあてるため、午前中のうちに絵具着彩作業を進めた。そして、お昼休みがおわり午後からの作業は、再度藤井の作品鑑賞からはじまる。今度は常設展示されていない、所蔵作品である「螺鈿象嵌小箱」を創作室に展示した。これも、作品を所蔵する美術館だからこそ可能なことである。

学芸員の説明により、様々な素材から制作された作品であることを伝える。様々な素材によるコラージュ技法作業の発想につながるきっかけを与える（図5）。

次は、蝶番や錠、木ネジなどの金具を使い、箱の蓋と本体部分を接合する作業に入る。蓋と本体を粘着力の少ないテープで仮止めし、キリとドライバーを使って金具を取り付ける（図6）。

箱の蓋と本体が接合され、宝箱としてのかたちになったら、いよいよ箱の内部の作業に入る。今回の造形ワークショップの目的を伝える大きな柱とっていい作業である。

箱の内側を装飾する素材として、藤井が小原村の和紙工芸を芸術に高める指導をしたことから、小原和紙を使用する。



図7 小原和紙コラージュ作業

小原和紙をコラージュし、そこにかたちのない宝物である、今の気持ちや思い、将来の夢などを書き込む。先に鑑賞した常設展示作品「継色紙」の発想に連結させた。

あまり触れる機会が少ない本物の小原和紙という素材に向き合いながら、和紙の特性や魅力を感じ、制作を進める。張り重ねることによる美しさ、ちぎった時に生まれる表情、水で濡らした筆で切る技法（図7）など、多くの新しい発見につながった（図8）。



図4 アクリル系絵具による着彩作業



図5 「螺鈿象嵌小箱」鑑賞



図6 蓋と本体の接合作業



図8 小原和紙によるコラージュ



図9 箱にいれられた今の気持ち

小原和紙のコラージュ作業後、箱の中に、かたちのない宝物として、今の気持ちなどを表現する作業に入った（図9）。

宝箱に今の気持ちを詰め込んだら、箱の外側の造形に入る。午前うちにアクリル系絵具で着色を施したうえに、さらに様々な素材をコラージュしていく。用意した素材は、ガラス玉やビーチグラスなどのガラス類、薄い銅板や真鍮板、カラーアルミ線などの金属類、石や枝などの自然素材、超軽量紙粘土など。薄い銅板に鉄筆で模様を彫り薬品でいぶす、超軽量紙粘土に絵具を混ぜ色粘土として使用するなど、実演を交えてそれぞれの素材の魅力や加工方法、接着方法、使用する道具の説明をする。子どもたちに、自ら素材や技法を選択させ制作を進めた（図10, 11, 12）。



図10 紙粘土を使って



図11 ガラス玉の接着



図12 様々な素材のコラージュ

作品が完成したら、それぞれ他の参加者が制作した作品を鑑賞した。自分とは違った表現を窺って、感じる機会を設けた。

最後に、「今の気持ちを詰め込む宝箱 — 藤井達吉の発想と自由なコラージュ —」という造形ワークショップの、「コンセプト」と「場」を基に生まれた目的や伝えたいこと、造形の素晴らしさや意義を話し、造形ワークショップを終了した。

#### 4. 結果

「現代美術」を「コンセプト」と設定して造形ワークショップを行った結果、「形ある物質が宝物として宝箱に入れるものだけではなく、形を成さない今の気持ちや夢、現在の記憶なども宝物に成り得る」という計画者の意図を伝えることにより、子どもたちのかたちのない宝物の表現として、現在の心境の他、親への感謝の気持ち、将来の夢などが作品に現れた。将来箱を開けた時に得る感動こそが宝物である、ということが子どもたちに伝わった。また、制作時の記憶に出会えるタイムカプセル的要素を備えた、時間を超える作品を制作することができた。時間や記憶なども造形表現であることに気づくことができた。

このように、造形ワークショップ全体につらぬかれた目的や目標を「コンセプト」として設定し、伝えることにより、子どもたちの造形活動において、新しい感覚や視点でものごとに向き合う姿勢や多様な価値観が生まれていった。

「碧南市藤井達吉現代美術館」を「場」と設定して造形ワークショップを行った結果、美術館に展示してある本物の芸術作品に触れながら、造形活動に取り組むことができた。展示作品の素材や技法の説明を基に作品を鑑賞、観察することにより、子どもたちの作品にも使用する素材の選択や工夫が生まれ、「作品がどんな素材で、どのような技法でつくられているか」という興味や視点が生まれていった。また、展示作品である藤井達吉の作品を鑑賞することにより、郷土の偉大な芸術家の芸術観に触れることができた。小原和紙を素材として使用することにより、藤井の業績などの理解を深めるとともに、伝統芸術について学ぶこともできた。

さらに、美術館とは美術作品を鑑賞するだけでなく、様々な創作に触れながら豊かな感性を養い表現力を身につけることができる場でもあることを伝えることができた。郷土の作家を子どもたちに知ってもらうことと共に、美術館が求めることにもつながった。

このように、「この場ならではの」「この場だからこそ」「この場で行う意味」を考慮して「場」を設定することにより、計画者、開催場所、参加者がともに目的を達成し、造形活動の発展につながることもできた。

アンケートをとった結果、参加者全員が、造形ワークショップに参加した感想について「とてもよかった (81%)」、「よかった (19%)」と答えている。その理由をみると、「自分で」「自由に」「たのしかった」という言葉が多くみられる (表3)。

これらの理由の要因が、箱の着色作業時に多くみられた。この作業は、作品の方向性をイメージさせる部分でもあり、子どもたちの自由で豊かな表現力や創造性を引き出せる重要なポイントといえる。感性や直感に訴える色彩選びや筆運び、混色によって偶然生まれる表情など、子どもたちの制作意欲に働きかける現象がみられた。計画的に塗り進める子どもたちにとっては、アクリル系絵具を使用することにより、重ね塗り作業がしやすく、低学年の絵具表現によくみられる混色による色彩の濁りなどを軽減できた。

表3 「たいへんよかった」「よかった」の理由

・こんなにすごい宝箱をつくれてよかった。
・たのしかった。
・とてもこうさくがたのしかったから。
・いろいろつけるところ。
・くぎをうったりするのがたのしかった。
・自分ではったりきったりして自分の形にできたからとてもたのしかったです。
・自分の好きなようにできたので、たのしかったです。またやりたいです。
・はこをつくるのがたのしかった。
・いろいろな物が使えて、楽しかった。
・和紙をつけるのが楽しかった。
・一からつくれて、かわいい石など色々かわいくできたから。
・自由にいろんなこと（ねんどで好きな色をませたり…。）をできたこと。
・工作の宿題がおわったから。
・とてもわかりやすく説明してくれたから。
・いろいろつけてたのしかった。
・和紙の使い方やガラス玉を使って箱をかざったりいつもできないことができたから。
・自分で木をくみだてて宝ばこを作るのがはじめてだから。
・自分で、自由にできるから。

さらに、筆や刷毛による着彩のみに留まらず、手や指で直接着彩を施すフィンガーペインティングが各所でみられるようになった（図13）。特にフィンガーペインティングの方法を説明し、促したわけではなく、自然に発生した現象である。これは絵具遊び、造形遊びにみられる、素材への探究心や表現する喜び、また心の解放である。子どもたちが、造形活動のプロセスを心から楽しめているといえる。

また、コラージュ技法作業時では、子どもたち自ら素材や技法を選択し、それぞれの作品に向き合った。様々な素材を自由に使い、表現を楽しむ姿が多くみられた。まさに、参加者である子どもたちが主体となって、自ら考え、表現し、造形の素晴らしさを感じ得た場となった。

以上のことより、「コンセプト」や「場」を設定することにより、造形ワークショップの骨格となる目的や達成される目標が明確化され、計画者の意図が参加者の作品やプロセスに現れる結果につながった。また、参加者が主体となって造形のプロセスや結果を楽しみ、工夫し、表現できる場面が生まれた。よって、造形ワークショップの定義から考えても、「コンセプト」や「場」



図13 フィンガーペインティング技法

を設定することで、子どもたちにとっての「よい造形ワークショップ」になったといえる。

## 5. まとめ

「現代美術」を「コンセプト」、「碧南市藤井達吉現代美術館」を「場」と設定し、子ども造形ワークショップを計画、実施した結果、日常からの新たな発見や気づきが生まれ、様々な感覚や視点、価値観の形成につながった。

また、美術館の展示作品から受けた影響による表現や創造の発展、さらに郷土の偉大な芸術家の芸術観や作品に触れることができた。美術館の役割やあり方を伝えられる機会にもなった。

様々な素材や技法、多様な価値観に出会うことによって、より自由で豊かな表現力や創造性が生まれた。そして、参加者が主体となって造形のプロセスや結果を楽しむことができた。

以上のことから、造形ワークショップ全体につらぬかれた発想や目的である「コンセプト」、そして造形ワークショップを行う場所や環境の意味や効果である「場」を大切にすることにより、知識や技術の習得などのみを目的としない、現代においての、日常においての美術や造形の意義や可能性を伝えられる、子どもにとってより「よい造形ワークショップ」となるのである。よって、子ども造形ワークショップにおける「コンセプト」と「場」の設定は、重要といえる。

今後の課題としては、造形ワークショップにおいて、まだまだ知識や技術の習得や資格の取得などを大きな目的とするという発想が、参加者である子どもやその保護者の中に存在する。造形本来の「つくりだす楽しさ、よろこび」を芯としながら、造形の意義、可能性そして、造形を通じた新しい視点や発見から生まれる日常の感動を伝えることのできる造形ワークショップを考えていく必要がある。また造形ワークショップを通して、「美術と社会のつながり」、「美術と豊かな人間性」の関係を明確にしていきたい。

## 引用文献

藤田令伊 2009『現代アート、超入門!』集英社

中野民生 2001『ワークショップ ー新しい学びと創造の場ー』岩波書店

高橋直裕 2011「世田谷美術館のワークショップ ー二十五年間のあゆみー」高橋陽一編『造形ワークショップの広がり』武蔵野美術大学出版局

高橋陽一 2012『造形ワークショップを支える ーファシリテータのちからー』武蔵野美術大学出版局

謝辞：本研究の実施に際して、多くの方々にご協力を賜りました。御礼を申し上げます。